

# インドネシアの光るきのこの森の

## エコツーリズム（続）

【お断り】本誌の発行が遅れたため、同内容の記事がその後「雑誌国立公園 626号 2004年9月」、「EICネット-Pic up No63. 2004年11月」に掲載されました。

小沢 晴司



写真1 ジャカルタのモスク

「原生林を満月とともに散歩し、ようやくインドネシアを少し知ったような感じでした。エコツアーってなに？光るキノコを見に行くこと？などと出発前考えていましたが、考えさせられる旅行でした。このツアーで、自然を大切にすることと同時に、その自然の延長にある村人たちの暮らしが守られることの大切さに気付きました。」



写真2 旧植物園長公邸

「川原でのランチ、目がくらみそうだったキャノピートレイル、トレッキングに光るきのこ、何も聞こえない静かなゲストハウスでの楽しい晚餐、なにもかも完璧な計画で、大満足でした。」「当地に赴任し定型化した日常を過ごしてきた自分にとり、今回のツアーはまさに『これがインドネシアだ！』を実感するものでした。素晴らしい体験を、素晴らしい仲間とともに味わったことを、人生の1ページに加えることができ、幸せでいっぱいです。」



写真3 植物園近くの市場

「光るキノコとは、自然が作り出した宝宝箱のようでした。これを見ると、ダイヤとか、真珠がかすんでしまいます。テナガザルの群れが我々を睥睨し、ヒョウがうるつきまわるのも、この自然の宝石を守らんがためのものかとも思いました。人が立ち入らないジャングルにこんな素敵なものがあるのですね。今まで生きてきて良かった、本当にそう思いました。」

前号に続くインドネシアの光るきのこの森（グヌンハリムン国立公園）ツアーのご案内です。私がこの森を保護するプロジェ



写真4 カラカサタケの仲間



写真5 ヒダはやや緑帯びている

クトに関わった2年の間、地元の経済裨益にたまることや、地元の人とその土地にある見事な自然を再発見するために、エコツーリズム活動を進める協力をしてきましたが、そこを訪ねる実験

ツアーの試行錯誤を通じて、グヌンハリムン国立公園核心部の魅力を1泊2日で味わうスタンダードプログラムはほぼできあがったように思います。冒頭の文は、私の帰国直前に実施した最後のツアープログラムに参加した方々からの感想の一部です。

プログラムではジャカルタを早朝6時に車で出発します。2億人の人口を有するインドネシアはその約9割がイスラム教徒という世界最大のムスリム人口をもつ国で、首都ジャカルタには巨大なモスクがいくつもあります。写真のものはジャカルタ港の近くに最近完成したばかりのものです(写真1)。ツアー参加者は主にジャカルタ在住のインドネシア人や日本人でした。ジャカルタからバスで高速道路を南下するとほぼ

1時間でポゴール市に着きます。200年前オランダ植民地時代に作られた総督の館だった場所は、現在、植物園(一般公開)と大統領宮殿(見学には許可が必要)となっています。写真は旧植物園長公邸で、現在は利用者のゲストハウスになっています(写真2)。植物園のまわりには市場があり買出しの客等でいつも賑わっています(写真3)。ポゴールから国立公園まで車で一般道路を約2時間程度の道のりですが、市街地を過ぎ、バナナ、キャッサバなどの畑や、パパイヤ、ドリアンなどの果樹園に囲まれた集落を抜けていくと、合歡の木に似たマメ科の木やゴムの木の造林地が広がる丘陵地に入ります。道端の製材工場の土場にはカラカサタケの仲間がたくさん生えており(写真4・5)、傘の裏を見ると少し緑がかっていました。



写真6 野菜や地鶏のランチを楽しむ

国立公園の区域に入る前のカバンドウンガン村には蚕を飼育している農園がありますが、畑の中に即席の屋台が組み立てられ、農薬をほとんど使っていない野菜や地鶏の昼食がでてきました(写真6)。お昼の場所は、この農園のほか路傍の食堂や河原での弁当など、ツアーのつど、いろいろと試してみました。やがてトウガラシやキャッサバなどの畑の中を通る石畳道を更に1時間少し



写真7 自然調査の研究施設



写真8 キャンピートレイル



写真9 熱帯林をハイキング



写真10 子嚢菌の仲間



写真11 開墾した畑で作業



写真12 米の収穫にまつわる祭り

車に揺られると国立公園の森に入ります。標高が高くなり、樹林の湿気と相まって空気も冷んやりとしてきます。森の中心チカニキ地区には、公園の自然を調査する研究基地があります(写真7)。インドネシア科学院の研究者ほか海外からもたくさんの科学者が訪れ、毎年昆虫の新種を見つけるなど様々な活動が続けられています。基地の背後の森にキャンピートレイルという熱帯林樹上部の生態系観察のための調査用歩道も整備され、熱帯林の生物層の大半が活動しているという樹冠の自然の様子を目の当たりにすることができます(写真8)。

国立公園のレンジャーの案内で熱帯林の中をハイキングすれば(写真9)、シヤカシの仲間などブナ科の木が生い茂り、ベニタケ科やテングタケ科のきのこを目にすることができます。朽ち木からは子嚢菌の仲間と思されるきのこもでていました(写真10)。やがて森を抜けるとチタラハブ村という小さな集落にでます。実は森の奥地にはオランダ植民地時代から墾かれてきた約1,000haほどの紅茶園が山の上に広がり、そのまわりにチタラハブ村など棚田や畑を配した集落がいくつか点在しています。チタラハブ村にあるゲストハウスで村の人に集落の生活の案内を頼むと、森の際の斜面に開墾した畑での作業の様子(写真11)や、水田の収穫にまつわる祭りの話などを聞かせてくれました(写真12)。さて、地元の建築スタイルで作られたゲストハウスで夕をとったあとは(写真13)、いよいよ光るきのこ探検に出発です。地上に銀河のように点々と連なるきのこは本当に小さいもので、ほとんどが1~2mm程度の銀の仁丹のような形と大きさですが、中にはヤコウタケの成菌のような形をしたものもありました(写真14)。



写真 13 ゲストハウスでの夕食



写真 14 大型の光るキノコ  
(撮影者 阪口 法明)

私の関わったプロジェクトが2003年6月で終了する間際、ジャワ島最大の原始林が残る西ジャワの山岳自然一帯を保護するため、グヌンハリムン国立公園はその周辺を含め約4倍近く(約11万ha)

に張られました。地元ではここを訪ねるスタンダードツアープログラムがますます人気を集め、2003年9月には地元のインドネシア紙に光るきのこの森を訪ねるプログラムを含めたこの国立公園のツアーのことが掲載され、より多くの利用者がこの森を訪ねるようになったと現地の国立公園から報告がありました。記事はインターネット(<http://www.kompas.com/kompas-cetak/0309/07/latar/537516.htm>)でみることができますが、記事の冒頭の箇所と光るきのこについて書かれている部分を皆様にもご紹介したいと思います。

「2003年9月7日 KOMPAS 紙報『グヌンハリムン国立公園放浪』西ジャワは、美しく冷涼な山岳自然で有名です。おそら

くあなたも、この州の憩いの地を時々訪れたことがあるでしょう。しかし、あなたが本当に美しい自然、特に澄んだ大気と静穏を伴ったより深い自然を好むのなら、あなたは、グヌンハリムン国立公園をその一つとして選ぶべきでしょう。国立公園の自然はより原始的で、そこは、人跡稀な山岳や深い森の緑に閉ざされています・・・」  
「グヌンハリムン国立公園の魅力は、日中以外にも、その素晴らしい世界を見ることができることにあります。夜間、私たちのグループは、他のいくつかのグループとともに、交替してムム氏に案内され、光るきのこを見にでかけました。どうやら、夜間にさながら灯火のように青光りするきのこの一種があるようです。それはまさに美しく、この世のものではありません。」(小沢 沢) (写真 15・16)



写真 15 熱帯林を抜けて農村地区へ



写真 16 ゲストハウスにて